

5-6

白十字ホームにおけるリハビリの取組みについて

リハビリの”成果”についての考察

リハビリ

成果

特別養護老人ホーム はくじゅうじ 白十字ホーム

理学療法士 さとう るみだか 佐藤 文孝

生活リハビリ課スタッフ

東村山市諏訪町2-26-1

042-392-1375

E-mail: hakujiyuuji@mua.biglobe.ne.jp

042-392-1255

URL: http://www.hakujiikai.or.jp

昭和42年開設。定員170名。短期入所併設12名+空床

所在地、東村山市。同一敷地内に病院・老健・在支・訪問看護・訪問介護・包括支援センターの事業所がある。2棟5フロアに分かれ、利用者の平均年齢86歳、平均要介護度3.8。常時分散ケアをはじめて3年。年間ボランティア5000名余。

〈取り組んだ課題〉

特別養護老人ホームにおけるリハビリ活動の“成果”と今後の課題についての考察

〈具体的な取組み〉 〈活動の成果と評価〉

- ・ リハビリ課のスタッフは6名（非常勤含む）
- ・ 午前中集団の運動療法とレク活動。午後は作業療法・言語療法・音楽療法や個別運動療法を行う
- ・ 午後は記録・カンファレンス・車椅子整備・レク活動・各種委員会参加等の業務がある。

○ リハビリ成果の評価の難しさ

昨今、施設でのリハビリにおいても、具体的な目標へのアプローチとその成果が求められている。

- ・ 身体機能の向上の取組み
 - ・ 車イスの移動が自力で行えるようになった方が活動範囲を広げた
 - ・ 立ち上がりや立位保持訓練の取組みがトイレ動作の安定につながった。
 - ・ 手すりにつかまっの立ち上がり動作を転倒予防の観点から、よりバランスのよい立ち方の訓練を行っていたら、動作の質が向上した
- ・ 日常生活活動やQOLの向上

リハビリによる運動機能向上ばかりでなく、体調や心理面など利用者の有する力を発揮できる環境が整ったともいえる
- ・ はっきり目に見える形での成果が現れにくい重度化・高齢化の進んだホームの利用者の現状。目に見える変化・目に見えない変化を“成果”とすると評価が大変むずかしい。

○ 運動やグループへの参加を習慣とすることの意味
「習慣」が、日常生活で継続していく上での力となり、その方の生活を形作っていく。

・ 「おはよう体操」の取組み（自主参加者+ケアプランで必要な方）

- ① 車椅子からイスへの以上
- ② 深呼吸
- ③ 日付けの確認
- ④ 発声
- ⑤ ストレッチ
- ⑥ 筋力運動
- ⑦ 起立・バランス運動
- ⑧ 手指の運動
- ⑨ 回想法

○利用者・ご家族の同意を得たケアプランを他職種協働で取り組む重要性

〈今後の課題〉

朝に起床してから（身支度・食事・排泄・入浴・他者との交流・活動への参加や休息・・・）夜に就寝するまでの、一見代わり映えのないように見える日常生活が、どれだけその人らしく生活して行くことを支える力となっていることであろう。

ホーム内、とりわけ居室やホールで営まれている生活の在り方においても、リハビリニーズの発見に努め、かわりを持てるように研鑽を重ねて行きたい。